

坂本純科さんの横顔



北大農学部卒業後、札幌市環境局で環境・緑化行政に従事しながら、福祉、国際、環境系NPOの活動に携わる。2006年からフリーでヨーロッパ各地のエコビレッジを訪問・滞在し、住民による環境運動を数多く、実体験。現在、英国ウェールズを拠点に「トランジションタウン」と呼ばれる循環型のまちづくりに取り組むなど、日英を往復しながら活動中。エコロジスト・コミュニティデザイナー。NPO法人トランジションジャパンにも参加。

帯びてきた。加えて地球温暖化による気候変動などで私たちの生活は危機に直面しているからだ。そこで、地域ベースで「しなやかで強い社会」を準備しようとの社会活動である。「無限の成長」を考えず、生活者の視点で解決の糸口を見つけた。お年寄りの知恵や地域の資源を有効活用していくことが求められている。その意味で南幌の活動は進んでいる。

欧州事例 エントになれば

ウェールズのコミュニティーガーデンで日本の野菜作りの指導と販売も手がけた。子供の環境教育や様々な人たちの社会参加を促す場だ。イギリスのシテイファームはロンドンに五十箇所ほどある。都市部で農業体験できる場。動物とのふれあいも重視、社会的・経済的弱者にとって重要な位置に。NPOが自治体や地域住民と連携して運営している。ドイツのエコツーリズムは重工業の跡地を利用した壁画群が特色。歴史を学びながらのアートプロジェクトも盛んだ。滞在型研修もある。公園では子供達自らが手作りの小屋を造っている。これがいじめの解消に役立っているという。フランスやスコットランドのエコビレッジは住民が互いに支えあう仕組み。環境に配慮する暮らしを目指している。リサイクルをはじめ、汚水処理、風力発電もある。人材の教育に力を注いでいる。

「循環型まちづくり」南幌も実践を



NPO法人設立を目指す「最終アグリカルネットワークフォーラム」(ふらつと南幌主催)が、三月十五日、月例フットパスと同時に開催された。幌向運河に沿って温泉へ。また久保農園で交流を深めた。フォーラムは基調講演にエコロジストの坂本純科さんを招き「持続可能な循環型のまちづくりを目指して」と題して、海外のエコビレッジなどを紹介した。後半は「南幌らしい暮らしを彩る環境づくり」を探るパネルディスカッション。会場からの意見も含め、熱く討論、坂本さんは「自信をもって実践を」と励ました。

石油依存から循環型自立へ

英国で流行っている市民運動がある。「トランジションタウン」だ。移行、変遷という意味で、石油依存型社会から継続可能なまちへ衣替えしようとしている。イギリス人口ブ・ホプキンスによって提唱された。なぜなら、一九七一年から米国の石油の産出量が減少し始めた。その十五年前に学会で発表された「ピークオイル説」(今後石油は減っていく)が現実味を

パネルディスカッション

酒井 南幌らしい風景を探りたい。これまでに形成してきたもの、これから形成するものを人が見て感じる、環境に調和したやさしい風景だろう。「ふらつと南幌」の理事として尽力していく。

坂本 普段の生活の延長なので、新たに作らないことが貴重である。

松本・山田 花仙人として花の華やかさを追ったけれど、緑があると心が安らぐ。子供に花壇を作ってもらった。その斬新さに驚かされた。大人の感性とはまったく違う。坂本 子供たちと一緒に食べられる葉物と花を組み合わせる花壇作りも良いかも。

濱田 二十六種類のイモ畑を見た時、感激した。色のコントラストが素晴らしかった。スパイスとして、花の説明が必要だろう。

パネリスト

- 坂本純科氏
- 酒井裕司氏(ランドスケーププランナー)
- 山田京子氏(フラワーマスター・南幌在住)
- 松本豊美氏(フラワーマスター・南幌在住)

コーディネーター

NPOふらつと南幌設立代表 濱田暁生

酒井 公園作りを子供たちが手がけた。自分が作ったから大切に使っている。

濱田 大人は手伝いに専念する。子供たちは体験の中から成長していくものだ。

会場 子供は馬や牛をみても感動する。遊休地に動物を飼いたい。また、運河の長官橋近くに昔あった「水車」もほしい。エコビレッジが作れる土地柄だ。マンション生活を札幌から四十分で来るこゝが出来ると。札幌圏を背にしているから「大した町」にきつとなる。寄留人口を増やす「仕掛け」を考えたい。「南幌にもっといたい」と思わせるには、ソフトが大切。成長していくための要素だ。全国フットパス協会の協力で、札幌だけでなく、東京圏へもアプローチしよう。